

清流

題字：芳野 充

令和3年12月30日
第60号

発行所 加来不動産㈱
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

献身さが共感をよぶ

今月ご紹介させていただく「二十の徳目」は、十七番目の「献身」です。「献身」とは、自分を犠牲にして、人のために尽くすこと、です。

この言葉を聞いてすぐに思い出されるのは、亡き母です。幼少のころのわが家は、日々食べるものにも困窮していた時期がありました。母はこまっている人を見ると放っておけない性格でした。

ある日、自宅にホームレスが「水と食べものをください」とやってきました。当然、門前払いするだろうと思っていると、母はなんと自宅にあげ、質素ではありますが食事をだし、さらにのび放題にのびた髪を散髪し、「くさいから」と風呂にまで入れたあと、おにぎりを渡し「身体に気をつけてくださいね」と送り出していました。

またそれは仕事でもそうでした。事故や病気にあい生活に困窮した人が家賃を滞納することがありました。しかし事情がわかるやいなや、わが家もきびしい経済状況であるにも関わらず、「まずは健康が第一。滞納した家賃は元気になっていいから」と、滞納分を立て替えて家主さんに支払っていました。いつもこんな調子ですから、立て替えた家賃が戻ってこないときもあり、わたしは四六時中お腹を空かせていました。

そのような母の姿をみながら、子どもながらに「なぜ母は自分たちがこまっているのに、そんなことをするのだろう」と理解できませんでした。しかし母が亡くなり、縁あってわたしは会社を継ぐようになってから、母のやってきたことの大きさを実感することになったのです。

二十代半ばの右も左もわからない青二才が、急に会社の代表として家主さんのところに顔を出すのですが、普通は相手にされません。しかしどこの家主さんのところに行っても、「あんたのお母さんには本当に世話になった」「お母さんは損得ぬきで良くしてくれました」「仕事以外でもいろんな相談によく乗ってくれた」と、未熟なわたしを受け入れてくださったのです。だから今があります。本当に有難いことです。

わたしは思うことは、損か得かではなく「ただ相手のために尽くしたい」という献身さが人の共感をよぶ、ということ。またそれは世代をも超えるということ。正直、母のマネはできません。しかしその想いの百分の一でも千分の一でもくみ取り、今度はわたしが次世代につながる献身的な行動がとれるよう、努力精進いたします。

加来 寛

